

報 告

# ベトナムの社会開発に貢献するNPOに対する 日本からの市民的支援の可能性 (第2報) —ベトナムのフエのNPOの調査—

佐藤公俊<sup>1</sup>, 羽賀亮介<sup>2</sup>, 高橋彩<sup>3</sup>, Dang Thai Quynh Chi<sup>3</sup>,

<sup>1</sup>一般教育科—社会科 (Liberal Arts-Social Sciences, Nagaoka National College of Technology)

<sup>2</sup>地球ラボ (Chikyu LAB, Nagaoka National College of Technology)

<sup>3</sup>フエハッピープロジェクト (Hue Happy Project)

POSSIBILITY OF SUPPORT AND APPROACH BY THE CITIZENS OF  
JAPAN FOR THE WELFARE OF VIETNAMESE CHILDREN AND  
INHABITANTS.  
(PART 2: HUE)

Kimitoshi SATOH<sup>1</sup>, Ryosuke HAGA<sup>2</sup>, Aya TAKAHASHI<sup>3</sup>,  
Dang Thai Quynh Chi<sup>3</sup>

## Abstract

This report is an investigation of Japanese NPO studies for Vietnamese social development and education and the possibility of support by the citizens of Japan. It is an analysis of social development policy in the public area and of citizen's cooperation in social welfare policy. A series of NPO studies including this report analyze the problems of how to connect planning, drafting and enforcement by civilians. In addition, one of these reports investigated the possibility of support and approach by the citizens of Nagaoka City Japan, for the welfare of Vietnamese children and inhabitants.

**Key Words :** *Vietnamese social development, NPO, cooperation, policy, Hue*

## 1. はじめに

本報告は、ベトナムの社会開発や教育に貢献するNPO (Non-Profitable Organization) の調査、およびそれに対する日本からの市民的支援の可能性の調査の第1次報告の一つである。本報告を含む一連のNPO研究の底流にある観点は、市民による社会開発政策ないし社会福祉政策の企画・立案・実施の検討・把握・分析という課題である。それは、NPOやNGOの組織や行動による社会開発政策ないし社会福

祉政策を、市民による市民主権 (the sovereignty of people) の行使として公共圏における市民の自律や連帯の原理の主体的実行として研究することである。また、ベトナムの子どもたちや住民の福祉を促進する支援、特に市民的支援の可能性を探るのが、本研究の重要な目的の一つである。ここでは主に長岡市の市民からの支援のアプローチを検討した。

共著者の内、佐藤公俊と羽賀亮介は、高橋彩、Dang Thai Quynh Chの協力を得て、ベトナムで貧困家庭の子どもたちの自立支援活動を行う、 Hue

Happy Project（以下 HHP と略称する）について、現地で聞き取り調査をし、また、担当者から入手した発表資料から、その趣旨、目的、組織と活動、背景や社会的関連を整理した。さらに、結果的に本稿の特色となったのは、佐藤公俊と羽賀亮介という日本側の調査担当者が、ベトナム語を理解しない難点を、二人と日本語とベトナム語を理解する NPO の関係者との対話によって報告の内容を作成するという形で乗り越えて、難点を逆手に取った共感的な方法を取ったことである。こうして本報告では、共著者として参加したこれらの関係者からの意見と情報とを積極的に取り入れることができた。共著者の高橋彩、Dang Thai Quynh Chi は HHP の関係者であり、殊に高橋氏からは自分の HHP との関わりと読者への支援要請を特別に寄稿してもらった。ただし、全体の問題設定と評価とは佐藤公俊によるものである。

本報告を含む我々の一連の研究の目的は先にも述べたように、公共圏における主体である市民の主権の行使として、自律と連帯の原理の一つの実現形態としての NPO や NGO の組織や行動の研究である。また、市民による企画・立案・実施としてのそれらによる社会開発政策ないし社会福祉政策の検討・把握・分析という市民参加も研究目的である。また、ベトナムの子どもたちや住民の福祉を促進する日本の市民的支援の可能性を探ることも目的の一つである。本報告では調査結果の検討からそれぞれの組織と活動、背景や社会的関連を分析することで、市民の支援の経路やポイントを追及して、特に長岡市民の支援の有効な経路に注目した。その際一定の社会関係の下、合理的かつ有効な援助を実現する支援方法を探及することにした。本報告を含む我々の研究全体の意義は、世界において現実に困難な状況にある人々への支援活動に協力する具体的方法を紹介するとともに、市民の自律・連帯の原理を実現する、たとえば市民による NPO や NGO の形態をもってする社会開発政策ないし社会福祉政策によって、世界の共感的共存への現実的アプローチを提案してゆくことである。

調査においては、一般に最後の評価が何を持って評価とするかによって調査の仕方等が変わるといわれる。その点についていうと、まず、本稿の NPO や NGO の評価基準は、基本的に市民の自律と連帯の原理とその応用である。ただこれだけでは狭いので、個々の NPO の持続可能性とその目的にとって、現状が目的に沿った方向に動いているかどうかということも評価基準となる。後者も「自律」のあり方のひとつといえるかもしれない。そうした評価のための

調査として、NPO の組織や活動の効果についての調査と、関係者の行為と意識を重視した聞き取りを多く行なった。インタビューのビデオも撮影したが、これは本稿とは別の機会に、HHP から了解を得たものを発表し、教材として使用したい。

調査結果から支援方法についての結論を先取りすると、フェハッピープロジェクトについてプロジェクトコーディネーターの高橋彩が本報告の補論で「私たちのプロジェクトに参加し続けている子どもたちは、しっかりと社会生活を送れる一人の素敵な女性へと成長してきています」と書いているように、フェハッピープロジェクトは、基本方針を「自立支援」に置いている。今後の自立的で持続可能なビジネスモデル確立のために必要とされる支援の方向性は、Social Venture 企業として HHP を運営していくために必要な資金や物資、人員である。したがって、最大の支援方法は、上記のような支援のほか、子どもたちの製作している製品を購入することになるのである。

## 2. ベトナムとフェ市について

外務省の HP からベトナムの一般事情を紹介する。

1. 面積: 32万9,241平方キロメートル
2. 人口: 約8,579万人（2009年4月1日時点国勢調査） 人口増加率: 1.2%（過去10年平均）
3. 首都: ハノイ
4. 民族: キン族（越人）約86%, 他に53の少数民族
5. 言語: ベトナム語
6. 宗教: 仏教（80%）、カトリック、カオダイ教他
7. GDP（2009年）: 1,658兆ドン（915億米ドル）
8. 一人当たりGDP（2009年）: 1,064米ドル
9. 経済成長率（2009年）: 5.32%（2008年は6.31%）
10. 物価上昇率（2009年）: 6.52%（対前年末比）（年平均指数6.88%）
11. 失業率（2009年）: 2.90%（都市部: 4.60%, 農村部: 2.25%）（不完全雇用率5.61%（都市部: 3.33%, 農村部: 6.51%））<sup>1)</sup>

フェ市は図-1に見られるようにベトナム中部の都市でトゥアティエン・フェ省の省都である。19世紀初頭に成立した阮朝の都が置かれた古都で観光都市。面積は83.3 km<sup>2</sup>、人口（2005）は333,004人、人口密度は3,997.6人/km<sup>2</sup>（10,353.7人/mi<sup>2</sup>）である。<sup>3)</sup>



図-1 フエ市の位置<sup>2)</sup>

### 3. フエハッピープロジェクト

本章の前半では、フエハッピープロジェクト(HHP)の説明資料<sup>4)</sup>から社会的背景、団体の来歴、発足の趣旨、目標、事業などを整理して紹介する。後半で関係者インタビューの結果を載せる。

#### 3. 1 フエハッピープロジェクトの背景と来歴

フエはベトナムの中部に位置し、かつては古都として栄えた美しい町で、リゾートや遺跡探索などの観光業が主な産業です。しかし他の大きな産業はなく、教育のない多くの人が失業状態で、政府からの援助もほんの少ししか得る事のできない貧しい人たちもたくさんいます。

Hue Happy Projectに来る子どもたちが暮らすコミュニティ PHU HIEP(フー ヒェップ)地区は、今は政府の政策により、数が減ってはいますが、かつてフエには船上で暮らしていた人々が住んでいます。シングルマザーやベトナム戦争時に南の政府の兵士として戦った人、その家族など被差別民としての扱いを受けてきた彼らは 様々な事情で、陸地で土地を持つことが出来なため、川に浮かべたボートの上で暮らすことを余儀なくされたのです。

しかし、1999年に開始されたドンバ市場付近の再開発によって、政府の決定により船上生活者の一部撤去が行われました。それにより彼らは内陸地にある定住区へと強制移住させられたのです。政府が貸与したのは洪水になりやすい土地であったために、住民には「2年後にはよりよい土地に再移住させる」という約束で土地を貸与しましたが、10年が経った今も政府は新しい土地に再移住させていません。わずか長さ50メートル、幅5メートルほどの道

の両脇に建つわずか50世帯の小さなコミュニティですが、周辺地域の住民からは、「犯罪者が住むところだ」「危険な人たちが暮らしている」と避けられています。



写真-1 フー ヒェップ地区のメインストリート

#### \*来歴

2006.08 自身もボートピープルとして幼いときにベトナムからアメリカに渡ったベトナム系アメリカ人が大学卒業後、ボランティアプログラムにより、フエ大学の外国語学部に教師として来越。ジュースを飲むために立ち寄ったドンバ市場で、ゴミ拾いをする女の子たちに出会ったのをきっかけに、在フエのベトナム人及び外国人に呼びかけ、当時フエにて活動していた日本人ボランティアと共にプロジェクトを開始する。

2008.09 英語クラス、奨学金付与、学校に行っている子供たちへの補習授業を開始。

2009.03 日本からデザイナー、アーティストを招聘し、新たなプロダクトデザインを依頼。10人の子供たちに絞った支援を開始する。

2009.06 朝食プログラムを開始

2010.04 子供たちの製作したアクセサリーをより多く販売するために販路を拡大

#### 3. 2 フエハッピープロジェクトの趣旨、目標、事業

##### \*趣旨

夢をもてること

誰かを信じること

自分を信じられること

フエの子どもたちの未来を創る3つのキー

Hue Happy Projectは、ベトナム中部の都市フエ市にある、かつて船上生活を送っていた貧困家庭の



子どもたちを対象にしたプロジェクトです。この地域の子どもたちは、教育もなく収入も低い両親の下に生まれたため、学校に通うこともできません。家族の生活を助けるために、市場でのゴミ拾いや路上での宝くじ売りなどをし、またいつ身売りをされるかおびえながら暮らす毎日でした。アルコール中毒や家庭内暴力の絶えない家庭には、子どもたちの居場所はなく、子どもらしいささやかな夢を持つこともありませんでした。

#### \*目標

Hue Happy Projectは、フエの貧困エリアの子どもたちが、安心して教育を受け、自らの力で生活できる環境を整えることを目的としています。

しかしそのためにはたくさんの問題を抱えています。無教育でDVやアルコール中毒の親たちに、子どもたちが生活の手段ではなく、宝であることを教えないければなりません。労働ではなく、教育を受けることこそ、将来の安定した生活につながることを理解してもらわなくてはなりません。子どもたちが今を憂うことなく、希望を持つことを知らなくてはなりません。

暴力や一人ぼっちになることにおびえることなく、誰かを信じることを経験しなくてはなりません。ささやかでもいいから夢をもつこと、そんな楽しい想像をできるようにならなくてはなりません。今ここには、夢をもって叶えた大人がいないのです。

私たちは、今、4人の女の子と歩み始めることを決めました。フエの貧困エリアにいる女の子たちが、ステキなアクセサリーを作り、自分の力で収入を得て、生活を安定させながら、きちんとした教育を受ける環境を整えること。まずそこからスタートすることにしました。

この4人が、自分の仕事をもち、収入を得て、そして安定的な生活を送れるようになることで、さら30人、300人の子どもたちが、彼らの真似をしたいと思うようになれば、彼らの生き方にあこがれてくれれば、きっとフエの子どもたちを取り巻く何かが動き出すと信じています。

今子どもたちは毎日の生活の中で

- ・まじめに働くこと
- ・規則正しい生活を送ること
- ・落ち着いて席につくこと
- ・ありがとうといえること

そんなことからスタートしています。

アクセサリーを作ることで、自分たちが集中して

ものづくりをしたことで、お金を得ること以外のたくさんのことを学んでいます。

フエの女の子たちの成長を、みなさま応援しながら見守っていただければと思います。

#### \*事業

そんな子どもたちが作るこのアクセサリー。

「家計が助けられますように」

「勉強が続けられますように」

そんな願いを込めて、子どもたちが一つ一つ心を込めて作りました。

このアクセサリーの製作収入による収益によって子どもたちの基礎教育を支援し今後の生活基盤を支えることができます。Hue Happy Projectでは、子どもたちが自らの手で生きていく、そんな環境を整えながら、長期的にサポートしていきたいと考えています。



写真-2 フー ヒェップ地区の教室。ここで授業が行われる

#### A. 教育サポート:

午前7:00から子供たちに朝ご飯を提供しています。これは、多くの子供たちが朝ご飯を食べずに教室に来るため、午前中のクラスに集中できなかったからです。朝ご飯は主にバンミーと言われるサンドウィッチや、ブンボーというフエ特有の麺です。

午前7:30から8:00まで、ベトナム語の授業です。スタッフとボランティアと一緒に教えています。

午前8:15から9:00まで、算数の授業です。

午前9:15から10:00まで、英語の授業です。

以上を毎週月曜日から金曜日まで行っています。

#### B. アクセサリー作り:

午後2:00から5:00まで行っています。学校に行つて

いない子供たちを中心に行っています。日本人デザイナーによる、アクセサリーを中心に作成し、フエ市内、ハノイ市内、日本のカフェやバーなどで販売しています。



写真-3 レストランで作ったアクセサリー

### C. 家庭環境サポート:

きちんと毎朝勉強をしたり、アクセサリー製作を行ったりした子供たちに対しては、「生活支援金」として、毎月家族や子供たち自身の生活を助けるためのお金を渡しています。金額は、子供の家庭環境やアクセサリーの出来具合などにも応じて、10ドルから20ドルです。今後は、子供たちが数年後には自立した生活を送る事のできる金額に増やしていきたいと思います。

\*PHU HIEP(フー ヒェップ)の女の子たちのはなし

#### A:(復学不可)

両親の生活は貧しく、仕事をしていません。Aが小学校に通ったのはわずか1年あまり。ようやく最近読み書きができるようになってきました。

自我の強いAですが、家では親は育児放棄状態で、家事全般をさせられています。父は、ハノイ近郊の金鉾山で働いています。母は仕事をしていません。二人の兄は、23歳、20歳で一人はパートタイムの運送業をしています。一人は働いていません。一人の弟は14歳で学校に行かず、家にいます。

#### B:(中学校2年生に復学中)

お父さんは、数ヶ月間失職中です。自分のお酒やギャンブルのためにシクロを質に入れてしまったため、シクロドライバーの職を失ってしまいました。お母さんは、市場で古着を売る仕事をしています。1日20,000~50,000ドンの収入になります。二人の姉は、ホーチミンに売られてしまい、住み込みの家政婦として働いています。もう一人の姉は、16歳で家にい

ますが、ハスの実を剥く仕事をしています。900,000vnd/month 16歳のお兄さんは、小学校5年生で勉強を辞めてしまい、今は無職で家にいます。二人の弟がいます。一人は7歳でもう一人は12歳です。二人は小学校に通っています。1年生と3年生です。おっとりしていてとっても辛抱強い子。

#### C:(復学不可)

器用でもないし、勉強もあまりできませんが、このプロジェクトに自分の居場所を見出し、なんとかついていこうと必死にがんばっています。今は姉の家族と暮らしているが、幼いときに母親を事故で亡くし、父はCを捨てて出て行ってしまった。二人のお姉さん、一人の妹12歳、一人の従姉と一緒に暮らしています。二人のお姉さんは、ハスの実を剥く仕事をしています。

#### D:(小学校最終学年)

お父さんは、ホーチミンで建設業の仕事をしています。お母さんもホーチミンの、バッグを作る工場で働いています。両親は、フエに仕送りをして、フエにいる子供を支えています。2人のお姉さんはホーチミンで一人は結婚し、もう一人はお母さんの手伝いをしています。Dはフエで祖母と祖父と暮らしています。祖母は時折、レストランの手伝いをしたりしています。一人の弟は、小学校3年生で彼女と一緒に暮らしています。

### 3. 3 関係者インタビュー

HHPの学習グループからアクセサリーグループに「進級」した子供たちへのインタビューを、9月21日にグループが作業していたフエ市内のUshiレストランにて行なった。Q:は我々の質問である。

\*E

Q: HHPでの学習と活動について

プロジェクトでは英語と日本語、アクセサリー作りを教えてくださいました。

今アクセサリーをUshi, Take, La Caramboleなどのレストランで作っています。ピアス、指輪、髪留めなどの製品を作って袋に入れてスタッフに渡します。

Q: 活動の感想

このプロジェクトに参加する前は、ゴミ拾い、宝くじ売りをしていました。HHPのおかげでそんな事をしなくてすむようになって、生活がよくなりました。

\*F

Q: HHPでの学習と活動について

アクセサリー作り，英語，日本語，礼儀（挨拶など）を学んでいます。このプロジェクトに参加する前は、学校を辞めてからは、ゴミ拾いをしていましたが、今はしなくて済みます。

Q：給料，生活

スタッフは色々なことに相談にのってくれます。

困ったことはスタッフに相談して助けてもらいます。生活が良くなりました。

Q：HHPの活動についていたい事

彩さんと一緒に仕事する事がとても嬉しいです。

Q：HHPの将来

ずっと存在し、私が働き続けられるとよいと思います。上手にアクセサリーを作れるようになりたいです。

\*G

Q：HHPでの学習と今の仕事，収入，生活，感想，HHPの今と将来について

学習：フランス人のボランティアが英語を教えてください。HHPのおかげでアクセサリーの作り方を学ぶことができました。短期大学で今勉強中、休みの日はここ（Ushi）でアクセサリーを作っています。

Q：HHPの感想

Projectが私の学費を支払ってくれ、自転車を買ってくれました。だんだん生活がづらくなく、よくなって来ました。

Q：将来：HHPでずっと働きたいと思います。

他の子供達もこのプロジェクトのおかげで、生活がよくなりました。

このプロジェクトを他の子供達の為に広げたいと思っています。

Q：夢と希望

E：ボランティアになりたいです。

F：普通の服を縫う人仕立て屋さんになりたいです。

G：ガイドさん

インタビュー直後の感想としては、子供たちのHHPへの感謝と信頼の気持ちを感じた。

学習グループへのインタビューで、9月21日「コミュニティ」の「教室」にて、学用品を配布して我々の絵を描いてもらってから、現在の学習状況、HHPの感想、HHPの今後について質問した。

\*H：

現在：学習中，中2，アクセサリー作り，国・英

感想：プロジェクトのおかげで色々勉強できます。国語（ベトナム語）の授業が楽しいです。

HHPで何をするか：HHPずっと続いてほしいです。

\*I：前に小1で学校を辞めた。

学習：このプロジェクトのおかげで読み書きができるようになりました。

感想：スタッフのみんなや教室が好きです。

HHPについて：ずっと続いてほしいです。

\*J：（中1で退学）

学習：アクセサリー，国語・英語

感想：とても役に立ちます。

教室が好きです。

HHPについて：プロジェクトスタッフは心が優しいです。教室が楽しいです。

ここでは子供たちの教室の楽しさとHHPへの持続の希望とを強く感じた。

### 3. 4 フェハッピープロジェクトスタッフの意見

ボランティアスタッフのチーさんとフェンさんに9月21日にインタビューした。

チーさんとフェンさんはともに、2年前から友人の紹介で参加。フェ大学日本語学科卒業。子どもにベトナム語と数学を教えている。また、通訳として、プロジェクト全体のコーディネーターとしても活動している。

Q:HHPのボランティアの参加の現状

先輩メンバー：チーさんのお姉さんの友人。

後輩メンバー：2名ほど居ます。

英語の教師は、フランス人，オーストラリア人，イタリア人等4人以上。科学大学と農林大学に通っているボランティアもいると思います。

Q:チーさん，フェンさんのHHPについての意見

児童虐待や育児放棄、犯罪者、アルコールやギャンブル中毒者など、子どもたちの親の多くは、子どもを自分たちの生活手段として利用することしか考えていません。そのため、できるだけ子どもたちをそのような環境から離して違う世界が存在することを示さなくてはいけないと思います。

### 3. 5 当初の評価・疑問とHHPの代表の意見

アクセサリーグループと学習グループのインタビューから、プロジェクトに参加している子供達が高橋彩さんを信頼し、慕っている気持ちが強く伝わってくる。子供達は高橋さんを信頼して成長している



と強く感じる。HHPは、子どもたちが継続してきちんとした生活をしていくことができるように“自立支援”を目標にし、アクセサリーを収入源とすることを目指している点は評価できる。結果的に、人を育て、社会開発を啓蒙している点も評価出来る。

プロジェクトコーディネーターの高橋彩さんは本章の後の補論でこう書く。

「様々なハードルをクリアしても私たちのプロジェクトに参加し続けている子どもたちは、しっかりと社会生活を送れる一人の素敵な女性へと成長してきています。」

このように、当初我々はHHPの活動のポイントは、支援の対象としている子供達を人として立派に育てていることと見て、その上でこれらの事業継続性とHHPの持続可能性は、いくつかの課題があって大変であろうから、日本の経営者団体であるロータリークラブに依頼したり提携すればどうか、また教師や技術や経営の指導者を派遣するためのミニODAを申請することもどうであろうか、という提案をして疑問を、高橋さんに示した。(ミニODAについてはJICAの地球広場と相談するとアドバイスをもらえる。4章でミニODAの一つの草の根技術協力について説明する。)

こうした疑問や課題提示に対して、高橋さんは、ビジネスパートナーとともにこれから“Social Venture”企業として組織を運営して行こうとする方針から、以下のように回答して下さった。丁寧な回答に感謝致します。回答は高橋：・・・(イタリック)で示す。

Q: まず、我々が一見した印象では、HHPの活動が高橋さん一人で保っており、仮に高橋さんが日本に帰国した場合、高橋さんが日本から支援するとしても、今の事業をフルに継続出来るかという疑問が生じた。もちろん地元の人たちが、教育支援と朝食提供など一定程度の活動を継続してくれるであろうことは、HHP関係者と話してみると感じられる。基本的課題は高橋さんがいなくとも、今の事業を安定的に継続できる組織づくりである。

高橋: この課題については、プロフェッショナルデザイナーなどを含めた日本人3人で事業を運営していくための、個人事業主登録をすでに済ませており、また、今後半年の事業計画についても既に作成済みです。

Q: また、ソーシャルビジネスとはいえ、アクセサリー事業の持続可能性に疑問がある。即ちアクセサリーパーツを日本からの輸入に頼るので、経費がかさむはずである。この点を内製化あるいは、国内での外注化ができないかどうか課題となる。

高橋: 資材現地調達についてのコスト面をご指摘頂いておりますが、HHPの方針・対象とするマーケットとしては低価格路線のみを目指している訳ではありません。日本の通販雑誌や、ベトナムでの日本人向け高価格土産雑貨店などでの実績がすでにあります。また、一部のパーツにつきましては、タイ、バンコクなどでベトナム雑貨店との共同購入なども予定しております。

Q: 課題の解決のために、販路開拓の指導をふくめて、日本からアクセサリーのビジネスモデルの確立を指導してくれる専門家を招いたらどうであろうか。

高橋: 現在、全国展開しているセレクトショップ、オンラインショップ、などでの販売に向けて準備を行っております。また、卸業者の方やアパレル業界で経験のある商社の方、その他支援者の方々の協力もあり、販路開拓やビジネスモデルの指導について頂いております。

アクセサリーのビジネスモデルは非常に固有性が強く、その分野での経験が豊富な方でないとなかなか難しい部分があるのですが、幸いな事にその分野に精通したプロフェッショナルな方々にサポートを頂いております。

Q: 地元産の特産品やパーツを用いるアクセサリー作りや、フェアトレード商品の開発を考えるとどうか。

高橋: 「地元産の特産品」については、なぜ、地元産がよいのか、という点を考慮したところ、あまりメリットがありませんでした。むしろ、フエにある地元産のものについては、商品としてのクオリティやデザインがあまりよくない、という事がすでに調査により判明しました。フエ地元産製品では、日本人のマーケットに受け入れられることが難しいです。また、「フェアトレード」についても、そのような冠をあえてつけることでマーケットが狭まってしまうという点を考慮し、あえて、「我々の考える」フェアトレードという独自のコンセプトを打ち出していきたいと考えています。

今後の事業計画の公表を待っての検討が必要で、早急に結論できないが、HHPの持続可能性について“Social Venture”企業としての方針は解答の一つとして非常に有望であると思われる。

## 補論: 皆様へのお願い

フェアハッピープロジェクトプロジェクトコーディネーター：高橋彩

子どもたちの暮らす地域は、もともとフェ市の川の上で船上生活を行っていた人々が政府の政策によって強制的に土地に移住させられた人々が集まって生活していますが、10年に渡るさまざまな経緯を経て、コミュニティは崩壊してしまいました。

親の多くは仕事もせず、その日その日を刹那的に送る人たちが大半です。お金はあっても、子どもたちの教育や育児に使うより、ギャンブルやアルコールなどに使ってしまうのです。或は、刑務所での服役を逃れるために、子どもを作ってしまう、などこの地域における子どもたちは非常に過酷な環境に置かれています。農村や地方などで金銭的にはより貧しいコミュニティはベトナム国内にたくさんあると思いますが、コミュニティが崩壊しているこの地域は、他の地域にはない様々な問題を抱えています。

子どもを自分たちの生活を支える手段として利用するために、幼い女の子を人身売買業者に売ってしまう、そのようなケースが多くみられます。売られた子どもたちは、ホーチミンなどの大都市の小さな工場などで、朝7時から夜11時まで、ときには深夜の2時すぎまで働かされます。また、ギャンブルなどで自分で返済することのできない巨額の借金をしてしまい、子どもはただ親の借金返済のために長時間過酷な労働をしなければならない場合もあります。こういった地域の住民は、ブラックマーケットでしか借金ができませんから、暴利を貪る業者の被害者にもなっています。

この子どもたちの親たちもまた、そうであったのかもしれませんが、生まれてくる子どもは親を選ぶことができません。そして、どんなに無責任な親に対しても、子どもたちは精一杯愛そうとし、助けようとしています。しかし、子どもたちの多くは年をとるにつれ、親のようになってしまうのです。幼いときは親を助けようと頑張っていた子どもたちは親の立場になると、自分の親のように振る舞ってしまうのです。

私たちのプロジェクトでは、子どもたちと向き合って2年ほどですが、子どもたちが親のようにならないように、違う価値観が世界には存在し、その価値観を大切にすることで、もっとハッピーな人生になる、ということを伝えようとしています。子どもたちに親やその環境以外の社会や大人たちをできるだけ

感じさせたり、違う文化の人たちを見せることで、新しい価値観を理解してもらおうと思っています。

子どもたちは毎日きちんと朝ご飯を食べること、大切にされるという実感が持てる環境があること、信頼できる大人たちに出会うことで確実に変わってきています。もちろん、中には私たちのプロジェクトのルール、例えば、盗んではいけない、嘘をついてはいけない、挨拶をしなくてはならない、などの基本的な約束事をできなかったために、プロジェクトに参加できなくなってしまった子どももいます、しかし、そういった様々なハードルをクリアしても私たちのプロジェクトに参加し続けている子どもたちは、しっかりと社会生活を送れる一人の素敵な女性へと成長してきています。

今後のこのプロジェクトの目標は、社会的企業として、この子どもたちを継続的に支援していけるような体制を作り、いずれは、“援助”するのではなく、対等なパートナーとして子どもたちと関係を築いていけたら、と思っています。

より高度な技術を学ぶためのワークショップや、子どもたちにいろいろな世界を知ってもらうためのショートトリップなど、今の私どもでは資金的な問題から実行することができないものの、子どもたちの将来のためにとっても大切だと考える様々な活動がたくさんあり、皆様には、このような心や技術の支援のために、ご支援を頂ければ大変幸いです。まだまだ、未熟な私どもですが、これからもサポートをどうぞ宜しくお願い致します。

### ■販売アクセサリーについて

アクセサリーは、フェにて子どもたちがハンドメイドで作っています。製品パーツは日本製、またデザイン・検品などは日本で行っています。ご希望の色の組み合わせでお作りすることも可能です。リクエストがございましたらお気軽にご相談ください。ご寄付の御受付もさせていただいております。

毎月50個のピアスが売れると・・・一人の子どもとその家族の1ヶ月の生活をサポートできます

毎月100個のブレスレットが売れると・・・アクセサリー製作の指導と英語の先生を雇う事ができます。

毎月500個のネックレスが売れると・・・フェに子どもたちのエデュケーションハウス&ファクトリーを設置できます

### ■HOW TO SUPPORT

アクセサリーを購入するとアクセサリー代の50%は、



子どもたちのサポート代として活用され、学用品や教材の購入、食事支援、けがや病気虫菌などの医療費、教師の給与などに充てられます。また25%はアクセサリ材料費(糸や金属パーツなど)、25%はベトナムから日本までの郵送費や印刷代といったその他の経費として使われます。

どうぞ宜しくお願い致します。

プロジェクトやアクセサリに関するお問い合わせ:  
フエ・ハッピー・プロジェクトプロジェクトコーナーディネーター 高橋 彩

Email : huehappy@gmail.com

http://picasaweb.google.co.jp/huehappy

#### 4. 日本市民の NGO 活動に対する日本政府の支援

最近の日本政府の途上国の開発支援策として、2010年9月の国連ミレニアム開発目標(MDGs)サミットでの途上国支援を話し合う首脳会合における菅首相の発表がある。首相は「途上国向けに保健と教育分野で総額85億ドル(約7,200億円)を拠出する支援策を発表した。地域コミュニティーでの人材養成を重視し、病院や学校、行政機関などが一体となって、途上国の社会の活力を高める構想」<sup>5)</sup>である。本稿で以下に検討する支援策も既存の制度の利用であり、こうした政府方針と整合的なものである。

日本市民の NGO の活動に対する日本政府の支援は以下の三つがある。

A. 日本 NGO 連携無償資金協力(外務省)

B. NGO 事業補助金(外務省)

C. 草の根技術協力(JICA)

こうした NGO 向けのミニ ODA のうち、一般市民がアプローチしやすい C. 草の根技術協力についてその概要と、三つの事業形態、申請の方法や条件を JICA と外務省の HP から紹介する。

まず、JICA の HP で紹介されている、草の根技術協力事業の3つのメニューのうち長岡市民が一番接近しやすいと思われる、②草の根協力支援型の概要をみよう。これは、市民と JICA との共同作業で、JICA は以下のように書いて募集している。

「草の根協力支援型は、国内での活動の実績はあるものの、開発途上国への支援の実績が少ない NGO 等

の団体が実施したいと考える国際協力活動を、JICA が支援するものです。『こんな分野で活動したい』というアイデアの段階から JICA が相談に応じ、対象国の JICA 在外事務所等からの情報も参考にしながら、共同で事業を作り上げていきます」<sup>6)</sup>

上の②草の根協力支援型を含む、草の根技術協力事業について外務省の HP から整理して紹介する。

草の根技術協力とは、JICA が日本の NGO、大学、地方自治体、公益法人などの団体と共同で実施する、開発途上国の地域住民の生活向上に直接役立つ事業である。市民の発案による事業を共同で実施することにより、日本のより多くの方々の国際協力活動への参加を支援する。事業の実施期間及び規模は、最大3年間、総額5,000万円以内(※事業形態により異なる)

草の根技術協力の3つの事業形態

①草の根パートナー型

②草の根協力支援型

③地域提案型

上の3つの事業形態のうち②草の根協力支援型の募集内容は以下のようである。

「国内での活動実績はあるものの、途上国支援の実績が少ない日本の NGO、大学、公益法人などの団体(以下 NGO 等とします)が、国際協力活動への第一歩を踏み出すために JICA が支援するものです。NGO 等から事業のアイデアを随時募集し、案件形成などの相談に応じている。」<sup>7)</sup>

最後に草の根技術協力の②草の根協力支援型について、JICA 地球広場のウェブページからの基本情報と上の情報をまとめよう。

(1) 対象となる団体は

国際協力の経験が少ない NGO 等の非営利団体、大学、公益法人。海外での経験年数は問わないが、団体の「組織」としての能力や継続性を判断する目安として、国内外での活動経験が2年以上あることが応募の資格要件となる。国内での活動実績はあるものの、途上国支援の実績が少ない日本の NGO、大学、公益法人などの団体(以下 NGO 等と示す)が、国際協力活動への第一歩を踏み出すために JICA が支援するものである。NGO 等から事業のアイデアを随時募集し、案件形成などの相談に応じている。

(2) 対象分野

地域住民の生活に直接役立つ事業が対象。 コミ

ユニティ開発（農・山・漁村の開発を含む）、高齢者・障害者・児童・難民の支援、保健衛生改善、女性自立支援、生活環境整備、人材育成、地域産業振興、自然環境（森林・水域等）の保全、公害対策（水・大気・廃棄物等）など。ただし、宗教的活動と政治的活動に関する事業は対象外。

提案事業は途上国の地域住民が直接の受益者であることが必要。

(3) 事業規模・期間・募集期間

規模：総額 1,000 万円以内

期間：3 年以内

募集：随時受付

この ODA はまさに途上国支援の実績が少ない日本の市民の NGO や NPO の途上国支援活動への入門を促進し、また支援する制度と云える。

## 5. 長岡市民の支援 : 結びに代えて

最後に、フエハッピープロジェクトの事業に対して、長岡市民からの連帯としては多様な募金などの支援形態が考えられる。本稿は身近な例として、長岡ロータリークラブと長岡工業高等専門学校の関わりを取り上げる。

長岡ロータリークラブからは、フエハッピープロジェクトに募金で支援する事が考えられる。また、ビジネスモデルの現地指導という支援方法もありうる。資金支援、講師派遣、ビジネスモデル教示支援の長期の提携が望ましいが、長岡ロータリークラブへの説明と話し合いが必要である。長岡ロータリー側の現地視察も必要であろう。できれば、長岡ロータリークラブの属する国際ロータリー第 2560 地区の注目と支援が望まれる。

長岡工業高等専門学校のかかわりについては、ま

ず、学生諸君が以上のベトナムの情勢とフエハッピープロジェクトの状況、さらに支援の方法を知ること、知らせあうことである。学生諸君にはインターネット等を利用してより深く自主的に勉強してもらうことが望ましい。情報伝達・発信については、地球ラボでの HP にての紹介や、インターアクトクラブが学園祭でのアクセサリ販売や展示等の情報発信で NPO について知ることと知らせることが考えられる。また、インターアクトクラブとロータリークラブとの話し合いも必要であろう。

4 章で見たように、日本市民の NGO の活動に対する日本政府の支援のミニ ODA に、草の根技術協力事業があり、そのうち長岡市民が一番接近しやすいのは草の根協力支援型である。我々こうした制度の利用を考慮し、フエハッピープロジェクトと長岡ロータリークラブとの組み合わせで草の根協力支援型の ODA の申請の可能性についても、両者と話し合ってゆくべきであろう。

## 参考文献

- 1) 外務省の地域情勢についてのウェブページ  
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/vietnam/data.html>
- 2) Googleマップ  
<http://maps.google.co.jp/maps?hl=ja&ie=UTF-8&tab=w1>
- 3) Wikipedia フエの項, <http://ja.wikipedia.org/wiki/フエ>
- 4) フエハッピープロジェクト, 支援要請の配布資料.
- 5) 『日経新聞』2010年9月26日社説
- 6) JICAの地球広場のウェブページ  
<http://www.jica.go.jp/hiroba/menu/kusanone/shien/index.html>
- 7) 外務省のNGO支援についてのウェブページ  
[http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shimin/oda\\_ngo/shien/kusanone.html](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shimin/oda_ngo/shien/kusanone.html)

(2010. 10. 4 受付)